

報告

看護学生が行う災害ボランティア活動のための ＜ハンドマッサージ研修＞の効果と課題 －学生がコミュニケーションをとりながらハンドマッサージを 相互に提供し合う体験からの気づき－

The effectiveness of and challenges presented by nursing students conducting a hand massage workshop for training for volunteer disaster relief activities
－What students noticed from their experiences of mutual provision of hand massages while communicating with each other－

山田正実¹⁾, 片平伸子²⁾, 飯吉令枝¹⁾, 内藤みほ¹⁾, 石岡幸恵¹⁾, 高島葉子¹⁾, 岡村典子¹⁾
Masami Yamada¹⁾, Nobuko Katahira²⁾, Yoshie Iiyoshi¹⁾, Miho Naito¹⁾, Yukie Ishioka¹⁾,
Yoko Takashima¹⁾, Noriko Okamura¹⁾

キーワード：看護学生，災害ボランティア，ハンドマッサージ，災害看護

Key words：nursing student, volunteer disaster relief activities, hand massage, disaster nursing

要旨

本研究の目的は、ハンドマッサージ技術の習得と被災者とのコミュニケーションを考える研修会に参加した看護学生が感じた研修の効果と課題を明らかにすることである。研修会に参加した看護学部1～3年生を対象に、被災者の模擬体験を含む自作のプログラムによる研修を1回行い、事後に無記名自記式質問紙調査を行った。分析対象は24部で、学生が感じた研修の効果と課題に関する記述を意味あるまとまりでコード化し、意味内容の類似性でサブカテゴリ、カテゴリを作成した。ハンドマッサージの効果は【身体面の効果の実感】等、課題は【マッサージ技術の向上】等があり、コミュニケーションの効果は【被災者の気持ちに寄り添う方法についての気づき】等があった。ハンドマッサージとコミュニケーションを同時に行う上での課題は【会話とマッサージのバランスをとること】等があった。研修会の実施により、学生の災害や災害支援に関する意欲・関心の向上に一定の効果がみられたが、プログラムの改善に向けた検討が必要であると考えられた。

I. はじめに

わが国においては1995年の阪神淡路大震災を契機に災害看護の必要性の認識が高まり、2004年の新潟県中越地震では日本看護協会が災害支援ナースの研修を開始した（日本看護協会，n.d.）。その後、看護基礎教育においては2009年度新カリキュラムに災害看護が新規の授業科目として構築され、災害ボランティア

活動を実施している大学からは、ボランティア活動の経験により、看護学生としての気づきや自己の成長といった看護学教育における効果が得られたことが報告されている（富澤ら，2014）。

A看護大学では教員有志組織の災害時看護・支援ワーキンググループ（以下災害WG）が2011年に発足し、学内教職員及び学生への研修活動を実施してき

2016年8月17日受付；2016年12月7日受理

1) 新潟県立看護大学 Niigata College of Nursing

2) 甲南女子大学 Konan Women's University

た。2013年度の学生研修で、災害ボランティアの心得をテーマに、外部講師を招き研修会を実施したところ、多数の学生参加があり、学生からは「看護学生としてできることはあるか?」といった質問も出る等、災害ボランティアへの関心の高さがうかがえた。そこで、2014年度は看護学生が災害ボランティアで実施できるケアとしてハンドマッサージの研修会を企画した。

ハンドマッサージを選択した理由は、手は普段露出しており皮膚にタッチすることが容易な部分であること、ハンドマッサージは生体に大きな影響を与えず、心理的にリラクゼーション効果があり、さらに受け手と施術者の両者の間の心理的距離を短縮する効果がある(大川と東, 2011; Kunikata et al., 2012)ことから、看護師免許を持たない学生の立場でも行えるボランティア活動として適切であると考えたからである。また、柏葉ら(2011)は、東日本大震災後の仮設住宅において、1年生から3年生の看護学生の災害ボランティア活動を授業として実施し、ハンドマッサージやフットマッサージ、血圧測定による健康チェック等に参加した学生にアンケート調査を実施した。ハンドマッサージの効果としては、「肌に触れることで伝わってきた被災者の思い」や「ハンドマッサージで開いたところ」があり、沈黙の中でも被災者の思いを共有できたり、ハンドマッサージをする中で被災者が徐々に話をしてくれるようになったりするというものだった。

さらに本研修会には、ハンドマッサージに加え、被災者とのコミュニケーションについて考える内容を含めた。その理由は、学生がハンドマッサージの前に、まず被災者のプライバシーの領域に入ることを許され、肌に触れさせてもらえること、さらには被災者の自由な語りを促し傾聴し、自分はどう反応するのかを知る等、ボランティア活動のための最低限の準備をする必要があると考えたからである。中島ら(2013)は、2011年の東日本大震災後の仮設住宅でボランティア活動をした看護学生の自己報告書を分析し、多くの学生が住民とのコミュニケーションに難しさを感じていたことを報告している。また、深澤ら(2013)は、仮設住宅等でサロン活動を継続してきた学生ボランティア団体の学生たちは、活動当初は話をすることだけでも戸惑いを感じ会話も続かない、発災当初の辛い状況を話されるのが怖かったことを明らかにしている。このように被災者のところに触れることは容易なことではないが、ケア時には学生たちが怯えることなく、誠意をもって被災者と向き合うことが出来るように、可

能な限り準備を整える必要があると考えた。

そこで、当災害WGでは、看護学生が被災者とかかわる具体的な手段を身につけることで災害支援に向かうことに自信を持ち、さらに災害支援に関心を高めることに役立つことを目的として、ハンドマッサージ技術の習得と被災者とのコミュニケーションを考える研修を実施した。次に、それら研修の効果と課題を参加した学生の視点から明らかにし、今後の研修企画や看護基礎教育の資料とするため、研修会後に質問紙調査を行った。

Ⅱ. 研究目的

本研究の目的は、ハンドマッサージ技術の習得と被災者とのコミュニケーションを考える研修会に参加した看護学生が感じた研修の効果と課題を明らかにすることである。そして、研修が、参加した学生の災害支援に向かうことへの自信や災害支援への関心を高めることに役立ったかを検討し、今後の研修企画や看護基礎教育の資料とする。

Ⅲ. 研究方法

1. 研修会の実施

目的：被災者と関わる具体的な手段を身につける。災害支援に関心をもつ、高める。

目標：被災者支援としての癒しケアの一手技(ハンドマッサージ)の目的や方法を理解し、一通り実施できる。マッサージ実施時の被災者とのコミュニケーションを模擬体験し、学生同士でフィードバックし合うなかで、被災者との向き合い方を考えることができる。

対象者：学部生の希望者として、約2か月間ポスターを学内に掲示して参加者を募集した。

日時と場所：平成26年8月 午後3時間、学内教室。

内容と時間：①ハンドマッサージの方法を学ぶ(40分)：文献(池田, 2013; 山本, 1997)を参考に自作したマッサージ手順(両手実施で15分程度)の資料を用いて災害WGメンバーが講義とデモンストレーションを実施後、学生同士で20分程度の練習を行った。②被災者とのコミュニケーションについて学ぶ(20分)：学内教員の講義で、内容はハンドマッサージをするという目的を自覚し、呼吸を整え、ゆっくりマッサージする。焦らない。話をするかどうかは相手しだいであり、相手が話し始めたら目を見て傾く。最後は会えたことへの感謝を伝える。③異学年ペアで、支援者と被災者の役割交代し2ペアで体験(60分)。この際、参加した学生それぞれが被災者を想定し、想

定した被災者に対して支援を行った。④まとめ (20分) : 6名程度のグループでマッサージの効果、被災者とのコミュニケーションで難しかったことや自分の課題等について自由に発言しあった。研修会終了後に研究協力への説明を行った。

2. 研究対象者

研修会に参加した学部生で、研究への参加・協力の同意が得られた学生。

3. データの収集方法

自作の無記名自記式質問紙による質問紙調査。研修会終了後に質問紙を配布し、回収は1週間以内として、大学事務室のレポート提出棚に投函を依頼した。質問紙では、前述の大川と東 (2011)、柏葉ら (2011)、Kunikata et al. (2012) の研究を参考に①ハンドマッサージの効果と難しさについて、深澤ら (2013)、中島ら (2013) の研究を参考に②ハンドマッサージ提供時の被災者とのコミュニケーションで感じたことや自分の課題について尋ねた。これらに加え、研究目的に沿って災害支援への自信や関心への影響を検討するために、研究者独自の質問内容として③今後、災害ボランティアに参加してハンドマッサージを提供することについて④災害・災害ボランティア等への関心の高まりについて尋ねた。なお、①～④は研究参加者が感じたことをありのままに表出してもらうために回答は自由記述とした。さらに関連要因として⑤学年、⑥ハンドマッサージの学習経験・提供経験の有無、⑦研修会に参加した理由 (複数回答)、⑧支援者と被災者の役割交代した相手の学年を質問した。

4. 分析方法

数量データはExcel 2013を使用し、単純集計を行った。自由記述は、学生が感じた研修の効果として、ケ

アの効果や気づいたこと、分かったこと等の研修の成果と捉えられる記述内容を、また学生の感じた研修の課題として、ケアに関して難しいことや分からないこと、不足といった問題を含み、今後ケアを提供する上で課題となる記述内容を、それぞれを意味あるまとまりで文章を区切る、もしくは1つの質問項目についての複数の文章をまとめてコード化した。これらのコードを意味内容の類似性によってまとめ、サブカテゴリ、カテゴリを作成した。これらのカテゴリ作成の過程は研修会を主催した複数の研究者が別々に行い、その後、研究者間で検討を行って修正し、信頼性および妥当性の確保に努めた。

5. 倫理的配慮

研修会終了後に、研究の目的、協力依頼の内容と方法、自由意思での参加であること、学業成績には一切関係しないこと、研究参加での利益と不利益、無記名であり匿名性を確保すること、結果は関連学会等に発表すること、質問紙の冒頭にある「研究参加に同意する」のチェックをもって同意を得たものとする。以上の説明を文章と口頭で行った。質問紙はA3用紙1枚の中折り形式で、回収については表紙を外側、質問紙面を内側として投函を依頼した。また、新潟県立看護大学倫理委員会の承認を受けた (承認番号 014-07)。

IV. 結果

質問紙配布・回収数は25部で、うち研究参加に同意が得られたものは24部であった。(有効回答率96.0%)

1. 研究参加者の概要 (表1)

研究に参加した学生は1年生3名 (12.5%)、2年生

表1 研究参加者の概要

		N=24	
		人数	%
学年	1年生	3	12.5
	2年生	9	37.5
	3年生	12	50.0
ハンドマッサージ 学習経験	ある	9	37.5
	ない	15	62.5
ハンドマッサージ 提供経験	ある	9	37.5
	ない	15	62.5
参加理由 (複数回答)	ハンドマッサージに興味があった	21	87.5
	災害ボランティアに興味があった	10	41.7
	被災者とのコミュニケーションに興味があった	9	37.5
	なんとなく参加した	2	8.3
	その他	2	8.3

9名(37.5%), 3年生12名(50.0%)で, ハンドマッサージの学習経験では「ある」9名(37.5%), 「ない」15名(62.5%)で, ハンドマッサージの提供経験では「ある」9名(37.5%), 「ない」15名(62.5%)であった. 研修の参加理由は「ハンドマッサージに興味があった」21名(87.5%), 「災害ボランティアに興味があった」10名(41.7%), 「被災者とのコミュニケーションに興味があった」9名(37.5%)等であった. 技術実施のペアは2回とも異学年ペアだったものは20名(83.3%), 1回は同学年ペアだったものは3名(12.5%)だった.

2. ハンドマッサージの効果と課題(表2)

実施者と受け手の体験から感じたハンドマッサージの効果に関する記述は54のコードにまとめられ, 7サブカテゴリからなる3カテゴリが抽出された. 以下, カテゴリは【】, サブカテゴリは『』, 代表コードは「」で表す. 【身体面の効果の実感】としては『血行が促進され身体が温まる』等, 【心理面の効果の実感】としては『リラックス・鎮静効果がある』等, 【社

会面の効果の実感】としては『会話のきっかけになる』等があった.

ハンドマッサージの課題の記述は27のコードにまとめられ, 6つのサブカテゴリからなる3カテゴリが抽出された. 【マッサージ技術の向上】として, 『適した力加減でマッサージを行う』『自信を持ってマッサージする』ことがあげられ, 【対象者との関係づくり】として『初対面の人に触れる緊張がある』等, 【マッサージの実施や実施範囲の判断】として『マッサージを行う部分の選定が難しい』等があった.

3. ハンドマッサージ提供時のコミュニケーションの効果と課題(表3)

ハンドマッサージ提供時のコミュニケーションの効果に関する記述は10のコードにまとめられ, 4サブカテゴリからなる2カテゴリが抽出された. 【被災者の気持ちに寄り添う方法についての気づき】としては『会話は必ずしも必要ではないことが分かった』等があり, 【緊張が緩和していくことの実感】は『徐々に緊張がほぐれた』によって構成された.

表2 ハンドマッサージの効果と課題

カテゴリ(コード数)		サブカテゴリ(コード数)		代表コード
効果	身体面の効果の実感	9	血行が促進され身体が温まる	8 血行がよくなって身体があっかくなる
			自分の手を意識できる	1 自分の手を振り返るきっかけ
	心理面の効果の実感	32	リラックス・鎮静効果がある	17 気持ちがよくなるので落ち着くがある
			触れ合いによる安心感が得られる	11 タオルに包まれたり, 手を触られることで安心感を感じられると思う
			気分転換になる	4 災害のことを一時でも忘れる, 薄れさせる
	社会面の効果の実感	13	会話のきっかけになる	10 ただ面と向かって会話する場合より, 動作を取り入れることで話がしやすくなる
関係づくりにつながる			3 肌と肌を触れ合うことによるコミュニケーションで信頼関係を築くというところにあると思う	
課題	マッサージ技術の向上	18	適した力加減でマッサージを行う	14 力加減が本当に大丈夫が心配になった
			自信を持ってマッサージする	4 自分が不安になっていたら手を通して伝わるのが分かったので, 自信をもって, 堂々とできるようにになりたい
	対象者との関係づくり	7	初対面の人に触れる緊張がある	5 マッサージを受ける側がどれだけ安心して, リラックスして受けられるか
			相手と呼吸を合わせる	2 手を入れ替えたりする時に呼吸をあわせること
	マッサージの実施や実施範囲の判断	2	ハンドマッサージ適応外の方への断り方が難しい	1 傷のある人への断り方
			マッサージを行う部位の選定が難しい	1 手首より後ろは触られたいと感じた

表3 ハンドマッサージ提供時のコミュニケーションの効果と課題

カテゴリ (コード数)		サブカテゴリ (コード数)		代表コード
効果	被災者の気持ちに寄り添う方法についての気づき	8	会話は必ずしも必要ではないことが分かった	4 無理に何かを話す必要はないのだと思った
			傾聴が大切である	2 辛い体験や暗い話題を話されている間は、そのお話を聞くことが大切だと思う
			被災者という立場を意識し過ぎず、一人の人間として接することが大切である	2 話題によってはその立場や状況を考慮することも必要だと思うが、まずは相手を一人の人間として素直に接することが大切だと思う
	緊張が緩和していくことの実感	2	徐々に緊張がほぐれた	2 受け手側としては、初めは緊張したけど、徐々にほぐれていくのが分かった
課題	適切な話題・話し方・沈黙を用いた会話の展開	45	話題の選択が難しい	31 会話でどこまで触れているのか分からない
			沈黙は苦しい	9 沈黙が続くとやはり少し苦しかった
			会話の仕方が難しい	5 話すスピード
	被災者役割で気づいたコミュニケーションの難しさへの対応	1	実施者との間の壁を感じ、改めてコミュニケーションの難しさを感じた	1 自分が受け手側になっているときに、実施者の話し方に職業的(?)な雰囲気を感じ取ってしまい、話はずんだがどこか壁のようなものを感じ、あらためてコミュニケーションの難しさを感じた
経験の蓄積	1	経験不足を感じた	1 実際の被災者とコミュニケーションをしたことがなく、自分も被災したことがないため、経験不足を感じた	

課題の記述は、47のコードにまとめられ、5サブカテゴリからなる3カテゴリが抽出された。【適切な話題・話し方・沈黙を用いた会話の展開】としては『話題の選択が難しい』『沈黙は苦しい』等があった。【被災者役割で気づいたコミュニケーションの難しさへの対応】としては『実施者との間に壁を感じ、改めてコミュニケーションの難しさを感じた』があり、「実際の被災者とコミュニケーションをしたことがなく、自分も被災したことがないため、経験不足を感じた」こ

とによる【経験の蓄積】があった。

4. マッサージ・コミュニケーションを同時に行う上での課題 (表4)

ハンドマッサージおよびマッサージ提供時のコミュニケーションの効果と課題の記述以外に、両ケアを同時に行う上での課題を表現した記述が複数あり、本研修の特徴を示す結果として「マッサージ・コミュニケーションを同時に行う上での課題」としてまとめた。課題の記述は19のコードにまとめられ、「実施してみ

表4 マッサージ・コミュニケーションを同時に行う上での課題

カテゴリ (コード数)		サブカテゴリ (コード数)		代表コード
会話とマッサージのバランスをとること	11	会話とマッサージのバランスのとり方が難しい	11	実施してみて、話しながらマッサージすると手が止まったり、話を聞き逃してしまったりして難しいと感じた
対象者の反応に合わせたケアの提供	8	相手の反応を見て会話やハンドマッサージをする	6	呼吸をあわせ、相手側が話したいようなら話し、ただマッサージを感じ呼吸をあわせたいようならそうするなど、相手に合わせたマッサージ
		お互いに気を遣ってしまう	2	心理面でも気を遣ったり相手に気を遣わせてしまったりといった難しさがあると感じた

て、話しながらマッサージすると手が止まったり、話を聞き逃してしまったりして難しいと感じた」に代表される【会話とマッサージのバランスをとること】と、『相手の反応を見て会話やハンドマッサージをする』といった【対象者の反応に合わせたケアの提供】の2カテゴリが抽出された。

5. 災害ボランティアに参加し、ハンドマッサージを提供できるか否かとその理由

ハンドマッサージを提供できると回答したものが23件(95.8%)、「わからない」との回答は1件(4.2%)で、その理由は「経験がないため」であった。提供できるとする理由のカテゴリは『練習すればできる』等の【技術の向上】と『被災者の力になりたい』『心地よい体験を他者にも感じてほしい』等の【心理的な要因】に大別された。

6. 災害・災害ボランティア等への関心の高まりの有無とその理由

災害・災害ボランティア等への関心が高まったとの回答は17件(70.8%)あり、「わからない」は1件(4.2%)、その理由は「災害についてはあまりよくわからなかった」であり、不明が6件(25.0%)であった。関心の高まりの理由の記述は9件あり、『今回の知識と経験を活かしたい』等の【研修の内容】に関するもの、「興味は前からあったが、さらに興味を持った」に代表される、【参加以前からの関心】があった。

V. 考察

1. 相互に提供し合うハンドマッサージ体験から学生が感じた効果と課題

ハンドマッサージはマッサージの中でもメッセージを伝えたり受け取ったりするのに最適で、実施もしやすい方法であり、実施直後のリラクゼーション効果が認められている(岡本, 2014)。本研究の対象者においても、マッサージを受けて『リラックス・鎮静効果がある』といった【心理面の効果の実感】を体験していた。さらに、『血行が促進され身体が温まる』等の【身体面の効果の実感】や『会話のきっかけになる』といった【社会面の効果の実感】も学生は体験していた。東日本大震災時の看護学生のボランティア活動の報告の中で服部ら(2013)は、ハンドリフレクソロジーの効果として、手の疲労回復、リラクゼーション効果とともに、タッチングにより距離が縮められ、話しやすくなったことを指摘しており、実際の被災地支援の場においても本研究と同様の効果が期待できると推察された。これらの快の体験が『被災者の力になりたい』学生の

『心地よい体験を他者にも感じてほしい』という意思につながり、被災地において自らがマッサージを提供できるという考えの【心理的な要因】となったと推察される。

また、マッサージの課題として【マッサージ技術の向上】があがった。『適した力加減でマッサージを行う』ことについては、教授方法の課題もあると考えた。最初にデモンストレーションを行い、練習中に指導者が巡回し手本を見せ指導したが、指導者を増やすことやきめ細かく指導することが必要だったかもしれない。さらに、練習時間は手順確認を含めて80分程度であり、これが十分な時間であったかについても検討が求められる。マッサージの技術は1回だけの研修で身につくものではなく、繰り返し行うことで課題を克服し、自信を得ていくものであるため、今後、練習や技術提供の機会をもつことが望まれる。

2. 支援の入り口としての被災者とのコミュニケーション

今回の研修では、参加した学生それぞれが被災者を想定し、その被災者にケアをする設定でマッサージとコミュニケーションを行った。学生は10～15分程度のマッサージの間に何かしらの会話をせざるを得ない状況におかれ、しかも相手は異学年生であった。被災者に何を話していいのかわからない戸惑いと、実際に初対面に近い存在と会話をする事の緊張が、被災者とのコミュニケーションに関する記述において、『話題の選択が難しい』といった【適切な話題・話し方・沈黙を用いた会話の展開】という課題に関する記述が、記述全体の8割を占める要因となったと考えられる。学生が被災者支援という状況をイメージし、対象者と向き合う努力をした結果の感想であると考えられ、学生は支援の入口に立つという体験をできたのではないかと推察された。

また、学生は沈黙の大切さは理解しながらも、実際の体験では、『沈黙は苦しい』と感じていた。その一方で、被災者側の体験から『会話は必ずしも必要ではないことが分かった』『被災者という立場を意識し過ぎず、一人の人間として接することが大切である』と感じ、『徐々に緊張がほぐれた』と感じた学生もおり、模擬体験の効果がみられた。また、マッサージとコミュニケーションを同時に行ったことから【会話とマッサージのバランスをとること】や【対象者の反応に合わせたケアの提供】についても考える機会となり、自己の課題を発見していた。学生同士でフィードバックし合うなかで、被災者との向き合い方を自分なりにイ

メージし、考えることができたのではないかと考える。

3. 学生の災害支援への意欲と関心

ハンドマッサージについては『練習すればできる』等の【技術の向上】から、ほとんどの学生が被災地でマッサージを提供できると考えていた。被災者とのコミュニケーションについては、被災者をイメージするとどんな会話をしてよいのかはまだ分からないが、被災者役の体験を通して無理に会話をする必要はないこと等に気づき、『今回の知識と経験を活かしたい』との意欲が高まったと考えられる。また、参加学生の7割は災害や災害支援に関する関心が高まったと回答しており、本研修の成果の1つと考えられた。

4. 今後の教育への適用と展望

今回は、カリキュラム上の授業ではなく、自由参加の研修会としてハンドマッサージとコミュニケーションについて学生に教授した。研修会としての教育は意欲のある学生が参集して、簡便に実施できるという利点がある。一方、災害はいつでもどこで起こるかわからず、災害看護の知識や技術は全ての看護学生に必要となると考えられる。看護基礎教育における災害看護の到達レベルや基礎的知識とは何かについて教員間のコンセンサスがないうことが教育上の課題として指摘されており（堀内ら，2015），専門学校教員を対象とした調査では「経験不足」「演習が難しい」ことを理由に災害看護の授業は難しいと考えられている（関谷，2015）。一方、独自の災害看護教育をカリキュラムに組み入れている基礎教育機関による報告も多い（百田と中信，2012；佐藤，2014；澤田ら，2015）。A看護大学では2019年度より「災害看護活動論」が開講予定である。今回の研修で確認できた成果をさらに発展させ工夫を加えることで当科目を構成する一演習とすることも可能であると考えられる。

5. 本研究の限界と意義

本研究は、学生向けの災害支援研修プログラムを作成、実施し、その評価を行ったものである。対象者が24名と少なく、学年にも偏りがあり、また、もともと災害支援に関心のある学生が参加していることから、結果の偏りは否めない。しかし、今回の研修会によって、被災地でのケア提供を想定して、ハンドマッサージとコミュニケーションを同時に行う研修の効果と課題が示され、参加者の災害支援についての意欲、関心を高めることができた。また、今回の評価をもとに研修プログラムの改善を図ることができると考えられることも本研究の意義としてあげられる。

VI. 結論

看護学生向けの災害支援研修会を実施した結果は以下のとおりであった。学生が感じたハンドマッサージの効果は【身体面の効果の実感】【心理面の効果の実感】【社会面の効果の実感】があり、課題は【マッサージ技術の向上】等があった。コミュニケーションの効果は【被災者の気持ちに寄り添う方法についての気づき】【緊張が緩和していくことの実感】があり、課題は【適切な話題・話し方・沈黙を用いた会話の展開】が殆どであり、ハンドマッサージ・コミュニケーションを同時に行うことの課題は【会話とマッサージのバランスをとること】【対象者の反応に合わせたケアの提供】があった。7割の学生の災害や災害支援への関心が高まり、ほとんどの学生が被災者へのハンドマッサージの提供は可能であると考えたことから、研修会が災害や災害支援に関する意欲・関心の向上に役立ったと考える。今後、新設科目「災害看護活動論」における教育内容や方法の検討が求められる。

謝辞

研究に参加してくださったA看護大学の学生の皆様に感謝いたします。

文献

- 深澤未来，畠山陽介，橋場祐佳，他（2013）：看護学生ボランティア団体「カッキー'S」岩手県山田町における活動報告，地域保健，44（9），62-69.
- 服部将茂，前田志織，立木真美（2013）：東日本大震災における学生ボランティア活動報告－防災関連サークルが企画した被災地ボランティアで考えたこと－，日本赤十字豊田看護大学紀要，8（1），53-58.
- 堀内輝子，高田まり子，三浦まゆみ 他（2015）：東北6県の東日本大震災後における災害看護教育の実態と実践上の課題，日本看護学教育学会誌，25（2），83-92.
- 百田武司，中信利恵子（2012）：避難所疑似体験演習の教育的効果の一考察－救援コース履修者と一般学生の比較－，日本赤十字広島看護大学紀要，12，63-69.
- 池田明子（2013）：心と体を癒す手のひらマッサージ，主婦の友社，東京.
- 柏葉英美，奥寺三枝子，清水里香子，他（2011）：看護基礎教育における災害ボランティア体験の効果参加した学生のアンケートより，看護教育，52（10），852-855.

- Kunikata H., Watanabe K., Miyoshi M. et al. (2012) :
The effects measurement of hand massage by the
autonomic activity and psychological indicators,
The Journal of Medical Investigation, 59, 206-212.
- 中島佳緒里, 大渡佳世, 奥村潤子 (2013) : 仮設住宅
におけるボランティア活動を通じた看護学生の学
び, 日本赤十字豊田看護大学紀要, 8 (1), 41-46.
- 日本看護協会 (n.d.) : 本会の国内外における災害支
援活動実績 災害看護, [https://www.nurse.or.jp/
nursing/practice/saigai/#05](https://www.nurse.or.jp/nursing/practice/saigai/#05) (検索日 2016.7.26)
- 岡本佐智子 (2014) : 看護に活かすマッサージーラ
クセーションを促すハンドマッサージの効果の検証
ー, 看護技術, 60 (7), 719-723.
- 大川百合子, 東サトエ (2011) : 健康な成人女性に対
するハンドマッサージの生理的・心理的反応の検討,
南九州看護研究誌, 9 (1), 31-37.
- 佐藤まゆみ (2014) : 学生が主体的に学べる災害看護
に特化した授業案, 看護展望, 39 (1), 77-83.
- 澤田由美, 古城幸子, 中山亜弓, 他 (2015) : 看護系
大学における災害看護教育ー宿泊による授業形態を
体験した学生の学びから教育方法を検討するー, 新
見公立大学紀要, 36, 21-26.
- 関谷まり (2015) : 看護専門学校における災害看護の
授業実態と教員の災害看護教育への考え方ー看護教
員を対象としたアンケート調査からー, 日本災害看
護学会誌, 16 (3), 32-42.
- 富澤弥生, 小野木 弘志, 菅原 尚美, 他 (2014) : 東日
本大震災ボランティア活動による看護学生の学びに
関する検討, 東北福祉大学研究紀要, 38, 199-220.
- 山本千鶴子 (1997) : 高齢者の心を癒す! ハンドトリ
ートメント 15分施術法, 臨床老年看護, 20 (1), 90-
98.